The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語動詞における意味の抽象化過程の研究 : 補助動詞用法を持つ動詞の意味分析
Author(s)	由井, 紀久子
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40114
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 4 】

氏　　名	由　井　紀久子（ゆい きくこ）
博士の専攻分野の名称	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	第　12832　号
学位授与年月日	平成 9 年 2 月 26 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科　日本学専攻
学 位 論 文 名	**日本語動詞における意味の抽象化過程の研究 —補助動詞用法を持つ動詞の意味分析—**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授　土岐　哲 （副査） 教 授　真田　信治　　助教授　仁田　義雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は現代日本語における動詞のうち，補助動詞用法を持つ語を対象に本動詞との統合的な意味分析を行なったものである。本文は序章と 8 つの章および終章から構成されている。

補助動詞は文法論的には主にアスペクト的あるいはヴォイス的なふるまいをするものとして研究されてきているが，意味論的にはこれら文法化した用法は本動詞の意味が抽象化，希薄化したものと捉えることができる。この論文では，本動詞と補助動詞の意味を統合することによって対象となる動詞による概念化の問題を考察し，日本語動詞における意味の抽象化の認知操作過程を明らかにすることを目的としている。

序章では，まず意味の抽象化過程研究の意義が述べられている。意味論的には語の内部構造および抽象化という認知過程がどのようになされているかを明らかにすることに意義があるとしている。日本語教育学の観点からすれば，非日本語母語話者が日本語を学習する際，ある語による概念化のしかたを間違うと，誤用を生みだす原因になると考えられる。また，日本語教育学にはエティックな観点からの意味研究が必要であることも述べられている。音声学においては，音声記号が表わすような通言語的分析の可能性を目指した基準があるが，意味論においても通言語を分析できるような，すなわちエティックな分析の視点が必要だと述べている。

第 1 章では，方法論についての先行研究を分析している。本論文は認知言語学的なアプローチでの分析・記述を目指しているが，同じく認知言語学とかなり重なる分析を行なっていると看做されるジャッケンドフの概念意味論を取り上げ，受給動詞の意味を概念意味論的に分析し，その長所と短所を明らかにしている。意味の抽象化過程を分析・記述するにあたり，概念意味論のアプローチで大きな問題となるのは位置モードである。例えばジャッケンドフは何等かの移動は GO で表わすが，位置モードとは，その移動が物体の空間移動か所有権の移動か等を区別するパラメータとしている。物のやり取りを所有権が移動するというように Possession のモードで記述することになるが，実際は所有権のみならず，具象物も移動している。また，受給動詞でより抽象化のすすんだ用法では心的構成物を取り入れる必要があるが，概念意味論の関数表示では記述しつくすことができないとしている。

続く第 2 章では，他の意味理論の問題点を探りながら，この問題を解決するような分析方法を提案している。単語

の意味を「孤立系の意味」と「文脈からの干渉を受けている意味」とに区別して分析する。孤立系の意味とは文脈の影響を受けない状態で，1単語として認識されるレベルの意味であり，認識の原点としては自己あるいは自己がデフォルメされた姿が機能しており，その基本的な意味となると規定している。単語はまた，文脈におかれると，その干渉を受け，基本的意味が変容すると考える。分析においては意味の成分分析を援用するが，これはあくまでも認知過程を解明するための操作として用いられ，意味の弁別的特徴を無限に引きだすために用いられているのではない。

第3章から第7章までは補助動詞用法を持つ個々の語における意味の抽象化過程を扱っている。第3章では本論文の動詞の意味分析中，中心的な位置を占めているヤル・クレル・モラウを扱う。従来，受給動詞の補助動詞～テヤル・～テクレル・～テモラウは埋め込み構造を有し，本動詞において2者間でやり取りされる「物」が「埋め込まれた節が表わす行為」に写像したものであるという解釈が多い。しかし，2者間での行為のやり取りとは限らない用法もあり，それらは「行為の影響」「方向」「意志」を表わしている。いわゆる恩恵の補助動詞用法の意味を加え，これらの意味の連関は本動詞の基本的な意味からどのように説明できるかを論じている。分析にあたり孤立系の意味を意味成分に分け，〈移動〉〈起点〉〈着点〉〈方向〉をとりだしている。さらに本動詞，補助動詞を用法ごとにクラスターに分類し，それぞれのクラスターごとに意味成分を抽出している。本動詞の場合，基本的に孤立系の意味成分を踏襲しているが，《恩恵》が推論的意味として加わり，〈起点〉の〈自分〉が〈行為者〉に拡張することが特徴である。さらに補助動詞になると〈移動〉が〈行為〉になるのは従来の説に倣っているが，より抽象化がすすむと〈行為の影響〉へと変容する。また，〈着点〉の成分はさらに受給動詞が運用されるにあたりどのような機能を果たしているかをオマエニクレテヤルとサセテモラウを例に述べられている。前者では敬語における非焦点化とは逆に，本来求心的に用いられるクレルを聞き手に視点を移動させ，敬語とは逆の方策を使っていると分析する。また，後者については「虚」の使役を用いることにより，相手を高め，結果的に謙遜の方策を取っていると分析する。

第4章はイクとクルを分析している。イクは〈人〉が〈自己側〉から〈非自己側〉へ〈空間経路〉を通って〈遠心方向〉に〈移動〉することであるが，抽象化がすすむと経験的な心的構成空間へと移動することが意味成分になる。クルについてはイクとは移動が逆の方向であるが，より抽象化がすすむと移動経路が空間から時間軸に代わることによって変化や時間的継続を表わすとしている。

第5章ではイル・アルを扱っている。ここではイルとアルの生物，無生物の対立がどのように抽象化していくかに焦点を当てている。〈存在〉の〈位置〉が〈人〉になると〈所有〉の意味が発生するが，所有を表わす場合でも，娘や夫などの安定性のある場合と，ボーイフレンドなどの安定性の低い場合とで，イルとアルの使い分けが生まれる。ここでは生物，無生物の対立は不安定と安定の対立に転化させる。さらに補助動詞になると「走っている」「用意してある」のように〈動〉と〈静〉の対立に抽象化するが，～テイルのアスペクト形成としてのふるまいは複雑であり，結果の～テイルが果たして〈動〉といいきれるのかという問題は残している。

第6章ではオクとシマウを分析している。～テオクの準備を表わす用法，持続を表わす用法では〈経路〉が〈時間軸〉に，〈着点〉が〈目標状態〉や〈目標時間〉へと転化している。シマウはカタヅケルの類義語であるが，〈移動物〉の〈着点〉は〈閉鎖的場所〉であり，「胸にしまう」のように容器のメタファーで認識される場合は使用可能である。さらに「店をしまう」では〈行為〉が〈時間軸経路〉を〈移動〉することで説明している。

第7章ではミルを扱っている。ミルは他の動詞と異なり，空間的な移動を表わすというよりも感覚的な動詞である。意味成分を〈視野〉の〈移動〉で分析することにより，補助動詞の意味分析を可能にしている。

第8章では総括として意味の抽象化をまとめ，特徴をとりだしている。補助動詞となる動詞は〈移動〉を伴う〈着点〉を持つ動詞であり，〈移動空間〉が〈時間〉や〈心的空間〉へと写像されることによって意味の抽象化が起こっている。また，一般的な「抽象」，すなわちアナロガスなものが共通に持っている形成を考えるという意味での「抽象」との関係でいうと，記号学者パースの「思考が着目する知覚対象の1つの要素を取り上げ，その他の要素はまったく考慮に入れない働きである」との規定を受け，意味成分もある成分だけが残り，他の要素は希薄になるという点で関連づけている。

終章は日本語教育学への展開として，非日本語母語話者の日本語における概念化の問題を取り上げている。非日本

語母語話者は，限られた語彙でコミュニケーションを行なうが，分からない単語があると類義語の外延を増やして代用することがある。意味の抽象化を通して得られた結論を言語の単純化に応用しようとする試みが述べられている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，日本語補助動詞というさまざまな文法的ふるまいを見せる広範囲な動詞の用法を取り上げ，それらの意味分析を中心に意味の抽象化過程を論じている。主な成果として以下の3点があげられる。

成果の1点目としてあげられるのは，意味の抽象化という，いわば普遍的な認知操作の過程を本動詞と補助動詞の意味構造を統合的に明らかにすることによって明示的に示したことである。言語学において意味論的側面の研究はやや遅れていることもあり，これまで漠然と「意味が抽象化している」あるいは「意味が希薄化している」とは記述されることはあったものの，詳細な意味分析は行なわれてこなかった。本論文で動詞の意味の内部構造を明確にし，抽象化の過程という連続体で繋がる意味的連関を明らかにしたことがまず，特長としてあげられる。

成果の2点目は分析の方法である。従来，成分分析は親族名称の分析などから発展し，語彙の意味の弁別的特徴を取りだすために静態的分析に用いられてきた。本論文ではこれを認識の広がりという動態的な分析に応用した。意味成分を通言語的意味分析の基盤となるような分析単位として設定しているが，これにより将来，他言語との意味の抽象化過程の対照比較研究が可能になる。さらに，単語の意味に「孤立系」というシステムを設定し，文脈からの影響と単語固有の意味とを分割して分析したことも成果としてあげられる。文脈からの影響については未知のことが多いが，近年とりあげられているフレームやスクリプトを考慮に入れると，文脈は単語の意味決定に多大な影響を与えていると考えられ，文脈と単語の意味の関係を考察する上で，分析の基点として孤立系の意味を設定したことはあらたな知見である。また，認識の原点として自己が存在しており，自己から文脈によって意味が変容していくことを明らかにしたことも成果としてあげられる。

成果の3点目は，日本語教育学への応用の基礎となる研究であることである。第2言語としての日本語習得研究は端緒についたばかりであるが，意味の抽象化研究は人間の認知操作を扱っており，同一形式による表現という点から，類似と思考の問題，さらに類似であると認識することから第2言語習得上におこる第1言語の干渉，すなわち言語転移の問題などにも連なりうるものである。これらの点の研究は今後の課題に属するが，言語の認知という観点からの第2言語習得研究の基盤になることは間違いないだろう。

ただ，本研究にも問題がないわけではない。先にも述べた，文脈からの影響が意味にどのような変容をもたらすかについては十分に論じられておらず，今後の進展に委ねるほかはない。しかしながら，上にも述べたとおり，日本語の動詞における意味の抽象化過程の研究は他に類を見ないのであり，そのことがこの研究の価値を損うものではないと考えられる。

本論文は，この分野での研究に対して1つのあらたな方向を示しており，今後，この種の研究に少なからぬ影響を与える可能性があるものと考えられる。よって，本審査委員会は本学位申請論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい価値を有するものであると判断し，ここに報告する。